研究ノート

臼杵市深田の宝篋印塔（日吉塔）の造立年代について

――塔周辺発掘調査の成果から――

菊田　徹

一　はじめに

ここでとりあげる宝篋印塔（日吉塔）は、臼杵磨崖仏の彫られているところとして知られている臼杵市大字中尾・深田に所在し、国の重要文化財、特別史跡附の二重指定を受けている塔である。塔が所在するこの地域は、東・西・南の三方が標高四〇～五〇㍍の丘陵に囲まれ、北西に開口部をもつ狭い谷間の土地である。塔は、磨崖仏と相対する北東丘陵の裾部に位置している。ここは、丁度、現満月寺の北側七〇㍍のところにあたり、塔は、西側をゆるやかに傾斜する丘陵裾部の地山層を削ってつくり出された平担面に西面して建てられている。

この塔は、無銘であるためその造立年代については諸説があり、塔の様式、あるいは全国的に宝篋印塔が造立される時間的な背景などの観点から鎌倉時代中期説、後期説、室町時代初期説が説えられている。造立年代は、一応、鎌倉中期から室町初期と比較的短い時間内におさえられているが、磨崖仏と関連する寺跡の建物や寺域規模の変遷、あるいはその背景を考えてゆく上で、その造立年代を明らかにしてゆくことが重要な問題となっている。

過去、塔周辺において数回発掘調査が行われ、塔造立の年代を、おおよそうかがわせるような資料（遺物）を得たが、まだ亶

接的なものではなかった。こうした状況の中、昭和六十一年七月～十二月まで、永年の風化作用によって痛みがひどくなった宝篋印塔の半解体修理が臼杵市によって実施され、併わせて塔周辺の発掘調査も行われた。調査は、小規模なものではあったが、永年の課題であった塔の造立年代をほぼ明らかにしうるような資料を得るなど、大きな成果をあげている。

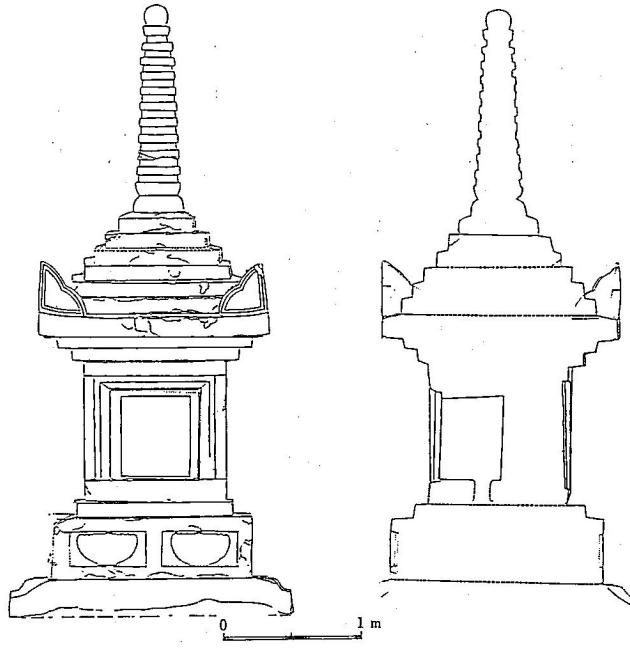
二　塔の構造と形式　（第一～四図）

塔は、台座、基礎、塔身、笠、隅飾突起、相輪の各部からなり、凝灰岩の十石からつくられている（第1図）。台座、上面に段形を彫った基礎がそれぞれ一石、塔身は、笠の軒までが一石で、軒の下面に二つの段形を刻んでいる。笠は六段からなる。下から三段目までを一石、次いで四、五段目を一石、最上段の露盤部分は相輪と一石をなしている。露盤と相輪を一石としているのは相輪の安定ということを考えたものであろう。隅飾はそれぞれ別石である。各部材の平面は、四隅が直角とならず、東西・南北の長さがまちまちである。台座下端から宝珠先端までの総高は四・五〇㍍をはかる。

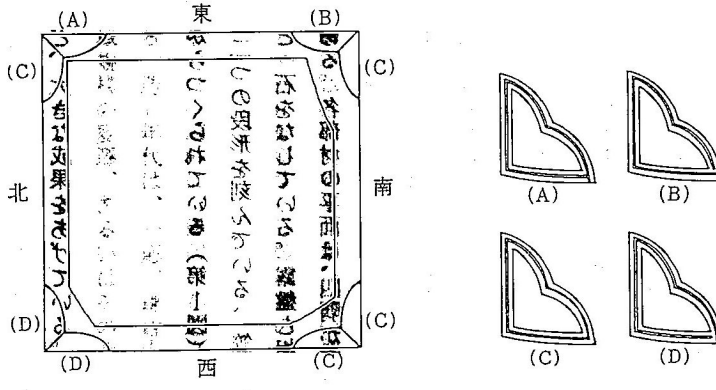
台座　本来は四面に刳形（くりがた）が付いていたと思われるが、東・西・北側は、冬場における凍結と融解を永年繰り返してきた結果、欠損し、わずか南側に認められるだけである。また、側面には見切（地上部と地下部の境）と思われる巾約二㌢、深さ一・五㌢の薬研彫の溝がめぐらされている。

基礎　北側上端の角の欠損が大きい。四面とも二区に分け、東を除く三面にそれぞれ格狭間を彫り込んでいる。上面には一段の段形を付けている。六個の格狭間は、それぞれ微妙な形の違いが認められるが、おおむね二種類に分けられる。

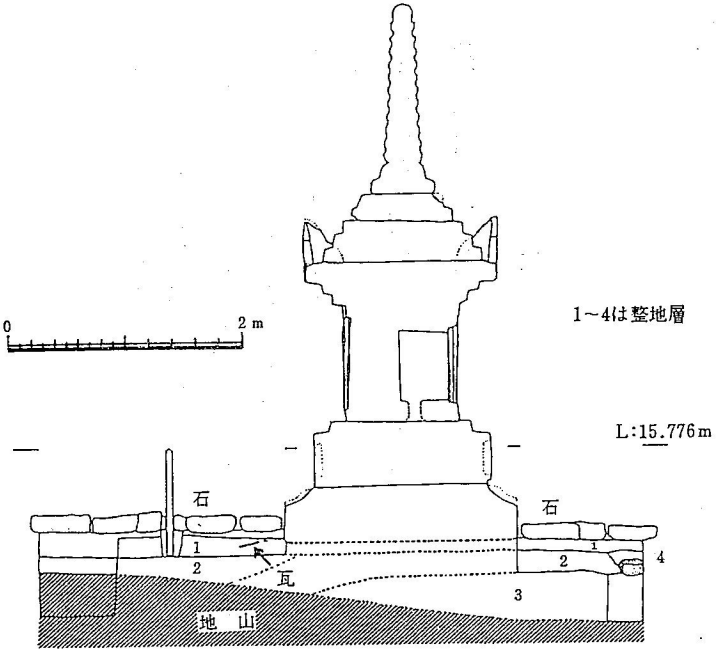
塔身　軒まで作り出す大きな石で、正面（西面）を仏龕（ぶつがん）状に刳り抜いている。正面に地長押を入れ、幣軸構えを設けている。地長押に径三㌢の軸摺穴が残っており、当初は扉が付いていたものと思われる。龕内部中央に径約十五㌢の奉納孔を穿っている。また、三方には軸郭を入れ、竪枠は大きく面取りを行って柱形を表わしている。柱、幣軸、軒の下端まで弁柄と胡粉を相互に塗っている。



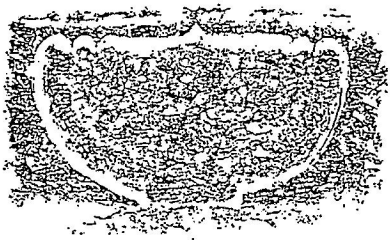
第１図　宝篋印塔実測図



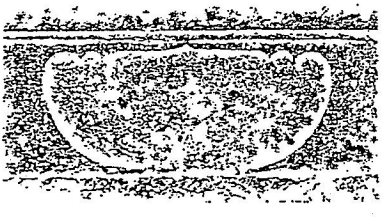
第２図　隅飾突起輪郭の種類
（「重要文化財宝篋印塔保存修理工事報告書」より転載）



第3図　宝篋印塔周辺土層断面図



宝篋印塔



満月寺五重塔

第4図　格 狭 間 拓 影

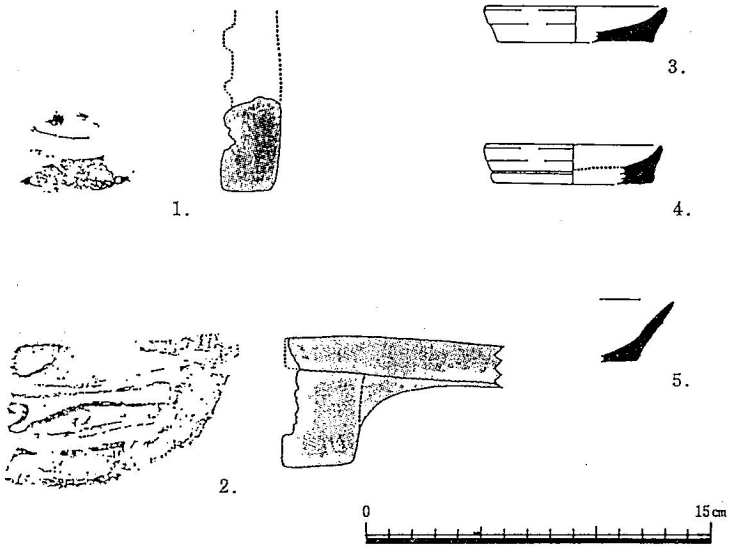
笠　下面に二段、上面に六段の段形をなしている。軒付に反り増を付け、下端には巾一・八㌢の水切溝をめぐらしている。軒付と下面の段形二段が塔身と一石になっている。解体修理の結果、軒付上面のほぼ中央に東西六〇㌢、南北七〇㌢、深さ二二㌢のすり鉢状を呈した奉納孔が彫り込まれていること、さらに笠石の下から三段目の上面中央に径三三㌢、深を約六㌢のくぼみをつくり、この上に重なる四・五番目石の中央に径三〇㌢の穴を穿ち奉納孔を設けていることがわかった。軒付上面の奉納孔には、水と泥が溜っているだけであったが、笠石の中に設けられた奉納孔には、長軸一～五㌢の碁石状小石が四、八七八個納められていた。そのうちの一個に判読しかねるが墨書があった。

隅飾突起　西北隅のものが当初の形状を良くとどめている。なかは総彫りの無地である。いずれも二つの弧、二重の輪郭を有している。輪郭のとり方が下端の角で違うものがある（第2図）一つは、弧の溝が下端まで達しているもの、一つは下端溝が孤まで達して、弧が交差しないもの、一つは両方が交差して終わるもの、今一つは、弧を下端まで引いて、下端を途中までとするものである。

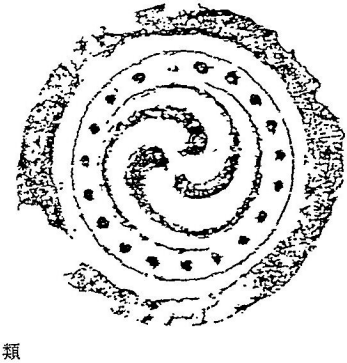
相輪　露盤から宝珠まで一石からなる。昭和三十八年に折れた九輪の部分を樹脂により接着し修理を施している。

3　地下遺構の調査　（第5図）

塔の解体修理に先だって、周辺の石敷遺構や塔の下の土層状況を探る調査を行った。この結果、石敷遺構については、柵の内側にあって、塔の北と東側部分については大正十四年以前に敷かれたものであること、それ以外の石敷は、それより後に敷かれたものであることがわかった。また、塔の周辺に土層を確認するための調査区を四つ設けた。その調査によって、塔は、東から西へ向かって下がる地山上に盛土整地を行い、平坦面をつくり出した土層上に据えられていることもわかった。この整地層中からは、瓦、土師質土器、瓦質土器、中国製陶磁器などが出土した。それら出土遺物のうちでも瓦や土師質土器については、近年の県下各地の調査によってその年代の把握が行われており、塔の造立年代を知る上に貴重な資料となるものであ



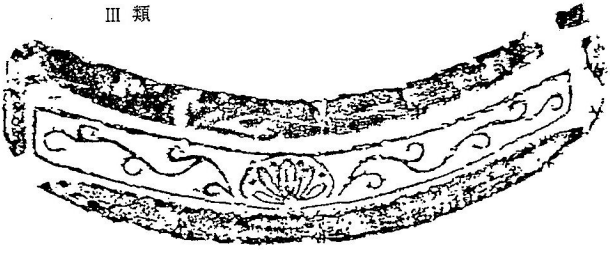
II 類



参考資料 1

参考資料 2

III 類



第5図　　出 土 遺 物

る。以下、その遺物について触れてみたい。

瓦　（第5図）軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などが出土している。このうち、その年代をおよそおさえることができるのは軒丸瓦(1)と軒平瓦(2)である。軒丸瓦は、小片であるが、瓦当面に残る圏線や珠文の状態から、過去、臼杵仏石群地域遺跡（註1）の調査で出土し、年代的な位置付けが行われている軒丸瓦Ⅱ類（参考資料1）と同タイプのものである。また、軒平瓦は、中心に上向きの五葉の間に四つの小さな珠点を配し、それを界線で囲んだ中心飾をもち、中心飾の下端から少し形のくずれた蕨手風の唐草を五回反転させながら連続させている軒平瓦Ⅲ類（参考資料2）と同様のものである。軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅲ類はセット関係が考えられ、鎌倉期後半という時間的な位置づけも行われている。このことから、整地層出土の文様瓦についても同様の見方ができよう。

土師質土器　（第5図）破片ではあるが、皿と坏の二種類が出土している。皿（3・4）は、口径八センチ前後で体部が短く、斜上方向へ直線的に立上がる。体部下端に厚みを持ち、断面がほぼ三角を呈す。色調は、褐色ないし淡い赤褐色を呈すものである。坏（5）は、体部中位にやや厚みを有し、体部が直線的に斜上方向へ立上がるものである。この土師質土器の皿や坏については、近年、県下各遺跡から出土する同様な土器について、形態による分類や遺構、共伴遺物などの関係から年代の位置づけが試みられている。それによると、塔の下の整地層から出土した皿や坏と同様の塔は、その形態的特徴から見て、十三世紀後半から十五世紀中頃までの間に出現する土器であるとされ、しかも同器形の盛期は十四世紀前半頃にあると考えられているものである。

4　塔の造立年代

この宝篋印塔の造立年代については、前述したごとく、無銘で、かつ文献資料が無いということから不明である。ただ、刻銘ある他地域の類似宝篋印塔との構造や形式上の比較から相対的な年代推定が行われてきた。この塔は、塔身を仏龕状にし

扉を付け、軒反りをもたせるという非常に珍しい建築的な表現をしている。これと同じ様な表現を施している塔はほかに例を見ない。したがって、他の塔との比較といってもいきおい、構造、あるいは形式の、一部分における比較ということにとどまらざるを得ない。刻銘あるものに限った場合、基礎が反花座となる例では、永仁元年（一二九三）の円福寺宝篋印塔（註2）徳治三年（一三〇八）安養院の宝篋印塔（註3）、正和五年（一三一六）勝林院の宝篋印塔（註4）がある。基壇では、文保元年（一三一七）極楽寺の宝篋印塔（註5）などがある。隅飾突起としては、2弧の輪郭でなく3弧ではあるが嘉元二年（一三〇四）比都佐神社の宝篋印塔（註6）、安養院の宝篋印塔（註7）などが類似した弧をもつものとしてあげられよう。これら塔との比較からみると少くとも、同時期かやや下がる時期が推察される。また、満月寺境内には、正和四年（一三一五）銘のある五重塔があるが、その基礎に彫られている格狭間と当宝篋印塔のものを比べて見ると、頂点から欠首、肩の張り、内部のふくらみ、脚など非常に良く似ている。拓本をとった格狭間（第4図）を重ね合わせて見るとその類似性はよりはっきりする。この格狭間が類似しているという点から見れば、当宝篋印塔は正和四年に近い造立年代が考えられるであろう。塔周辺の発掘調査において、塔が据えられている整地層中から鎌倉後期に位置づけられている軒丸瓦や軒平瓦が、さらに、十三世紀末頃から出現し、十四世紀前半頃にその隆盛をみる土師質土器が出土しているということから見ても塔の造立年代を十四世紀初頭頃に位置づけることは首肯できるものと言えよう。それでは、大分県内に所在する最も古い在銘の宝篋印塔と比べた場合はどうであろうか。現在、一番古い在銘の宝篋印塔としては、大野町中土師の貞和二年（一三四六）表宝篋印塔がある。基礎は壇上積。上面二段、塔身は無地。笠は、軒の下面二段、上面四段で最上段は二区に分け、縦の蓮子を入れているものである。年代的にやや下がるため、直接的な比較の材料とはならないが、県内の塔がこれ以後、格狭間の形態を含め、様式的にはほぼ同系統に属するという点から推して、この時期よりは造立年代は下がらないと言える。

註　1　「臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」の中において当遺跡出土の文様瓦を軒丸瓦についてはⅠ～Ⅵ類に、軒平瓦はⅠ～Ⅴ類に分類し、軒丸瓦Ⅱ類、軒平瓦Ⅲ類とも鎌倉時代後期（十三世紀後半～十四世紀前半）のものと年代的位置づけを行っている。

2 奈良県生駒市大字有里、円福寺に所在する。二基並んでいるうちの北側の塔に刻銘がある。基礎の上面が二段で、塔身の四面にある月輪に金剛界の四仏を薬研彫りしている。笠石は、軒の下面二段、上面六段。隅飾は笠石と同石でやや耳状を呈す。

3 神奈川県鎌倉市大町安養院、本堂の裏に位置する。基礎は四面を二区に分け、格狭間を入れている。上面に反花。塔身は輪郭を入れ、月輪に蓮花座付の種子。笠は五段で最上段は露盤をなしている。隅飾は二弧である。

4 京都市左京区大原勝林院町、勝林院本堂東側に位置する。二重の切石積基壇で基礎は無地、二段の段形を付けて上段は反花座としている。塔身には四仏の種子、隅飾は別石で、輪郭がついている三弧である。

5 神奈川県鎌倉市極楽寺57番地。同時期、同形式の二基の塔がある。左側の塔に刻銘がある。基壇を二区に分け格狭間を入れている。上面に反花座を付けている。基礎も二区に分け、上面二段。塔身には輪郭が付き四面に四仏の種子。

6 滋賀県蒲生郡日野町大字十禅寺に所在する。嘉元二年（一三〇四）の刻銘ある塔である。

7 註3に同じ

参考文献

1 「大分県史」一九八一 美術編 大分県

2 「大分県史」一九八二 中世編Ⅰ 大分県

3 「臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」一九八二 臼杵市教育委員会

4 「大分の古代美術」一九八三 大分放送

5 「重要文化財宝篋印塔保存修理工事報告書」一九八七 臼杵市

（臼杵市教育委員会・臼杵市双葉一一一組）